



公共施設の未来を デザインしよう

まちだニューパラダイム研究会 報告書

2015年8月～11月

町田市未来づくり研究所

まちだニューパラダイム研究会とは

町田市は、全国の他都市と同様に人口減少や高齢化の進展、高度経済成長期に整備された施設の老朽化等の課題に直面しています。それらは市の財政悪化や商業などの売上の減少を引き起こし、行政や民間のサービス低下につながることを懸念されています。

そこで、これらの課題を乗り越えるためには、人口が増加していた時代の価値観ではなく、人口が減少する時代に求められる新たな価値観に転換する必要があると考え、町田市未来づくり研究所では2015年4月に「まちだニューパラダイム—2030年に向けた町田の転換」という提言書を公表しました。提言書では、「SMART PUBLIC」という公共サービスの新しい形を実現し、「GREEN×PLAZA」という人と人が交流する場所を生み出していくことで、2030年に「寂れゆく町田」ではなく「きらめく町田」になると提案しています。

「まちだニューパラダイム研究会」（以下、研究会）はこの提言書の考え方を下敷きにししながら、これからの時代にふさわしい公共施設・公共空間づくりを目指すために、市民の方々とそのあり方について考え、新しいアイデアを創造する場となることを目指して開催しました。

全5回の研究会では、44名の方に参加頂き、毎回様々なジャンルでご活躍されている多彩な講師によるレクチャーを受け、多面的な思考でディスカッションをすることで、新たな価値観や具体的なアイデアが多く生まれました。

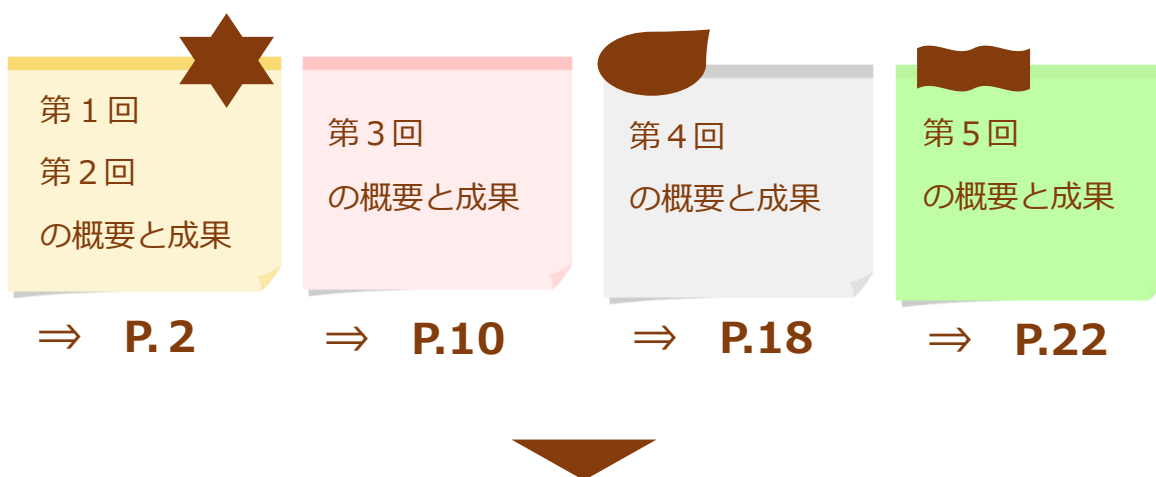
本報告書では、参加者から提案された具体的なアイデアを詳細にまとめるとともに、たくさんアイデアから読み取ることができる、市民の新たな価値観やこれからの公共施設・公共空間づくりに必要な考え方をまとめました。



本報告書の構成

各回の構成は、第1回から第4回までをワークショップ形式とし、冒頭にファシリテーターによるレクチャーを行い、その後に参加者が個人やグループに分かれて与えられたテーマに関してアイデアを出し合い、回によっては最後に発表をしました。最終回である第5回は、第4回までの内容を踏まえた特別講演の回としました。

本報告書は、前半は第1回から第5回の概要と成果をまとめるとともに、後半は全5回の参加者の意見やアイデアに基づいて「新しい公共空間や公共施設」に求められている内容をまとめました。



まとめ 市民の考える新しい公共施設及び公共空間	
1 公共施設及び公共空間に求められている機能・役割	⇒ P.24
2 新たな公共施設・公共空間づくりに必要な要点	⇒ P.27
3 参加者概要	⇒ P.28

第1回

第2回

シードリング～まちの種(公共空間)を探そう～

〔レクチャー編〕 8月23日(日) 10:00～12:30

〔発表編〕 8月23日(日) 10:00～12:30



ファシリテーター

齊藤 正(さいとう ただし)氏 (建築家/齊藤正毅工房代表)

瀬戸内国際芸術祭への参加や、数々の受賞歴を持ち、東日本大震災での社会貢献等も行っている。単に足し算・引き算の施設整備ではない建築物の本質を考える機会を与える。

〔レクチャー編〕

ねらい

◎まちづくりの種を見つけるための考え方・視点を養う。

▼レクチャー資料の一部

公共施設は本当にステレオタイプでいいんですか？

旧岡田邸改築前

Seedling

なんでも種になる
種、種、種………ネタさがし

バタフライ効果

アマゾンを舞う1匹の蝶の羽ばたきが、遠く離れたシカゴに大雨を降らせる。

風が吹いたら桶屋が儲かる

ワーク内容

個人ワーク <2030年にきらめいている町田の未来を想像する>

◎以下の○の部分埋めてみよう！

「2030年すでに町田はきらめいている。

それは○○年○月○○（場所）を中心にはじまった○○がきっかけだった。

○○さんと○○さんが○○○○○をはじめた。

○○（場所）で○○（事）が○○○（毎日のように）○○○○○。

だれもこの出来事が町田をここまできらめかせるとは思っていなかった。」

宿題

◎都市核、副次核、その他住宅地エリアの公共施設や公共空間について、2030年にきらめく町田の未来を実現するための種になりそうなものをピックアップしてくる。
また、できればその種の写真を撮ってくる。

〔発表編〕

ねらい

◎見つけた種（写真）を持ち寄って、レクチャー編で気づいた考え方や視点をヒントに、2030年にきらめく町田の未来を実現するためのまちづくりの具体的アイデアを考える。

ワーク内容

グループワーク 1

◎各自持ってきた種を紹介しあう。

グループワーク 2

◎種を育てて、2030年にどんなきらめく町田になっているかを議論し、そのためのまちづくりの具体的アイデアを模造紙に写真や絵を取り入れつつまとめる。

第1回・第2回の成果

まちづくりの具体的なアイデア～「2030年きらめく町田」像～

都市核
(町田駅周辺)

1班

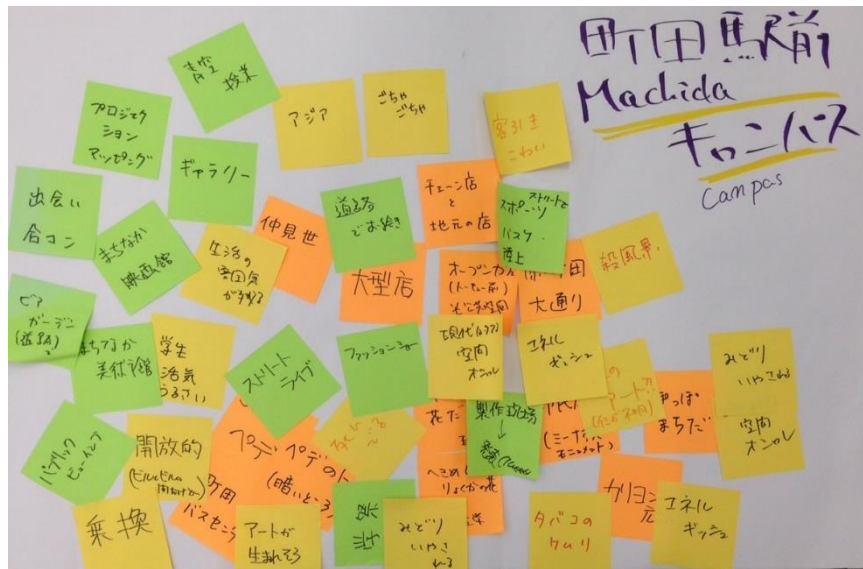
2030年の町田は

Machida Campus 町田駅前キャンパス

できらめいている

「アート×ストリートをテーマに大学生や大学の持つネットワークで町田駅前のストリートをおアートで盛り上げる。」

- ・ストリートでのスポーツ・ライブ・ファッションショー・青空教室・お絵かき大会や、ペデストリアンデッキ下の暗さを活かした映画館やプロジェクションマッピングなどができるといい。
- ・それ以外でも学生主催でストリートを盛り上げる企画をどんどんやっていくのが良いのではないかな。
- ・大学コンソーシアムのアート美術祭的なイベントを企画するようにしていくことは、既存の資源を考えるとすでに可能性が見えている。



講師のコメント



見てきたものについてよく分析されていて、特に通り・モニュメント等が意識されていると感じます。アートをここで育てていくにはどうしたらいいかな等を具体化して、議論を展開させていくとよいと思います。

2班

2030年の町田は

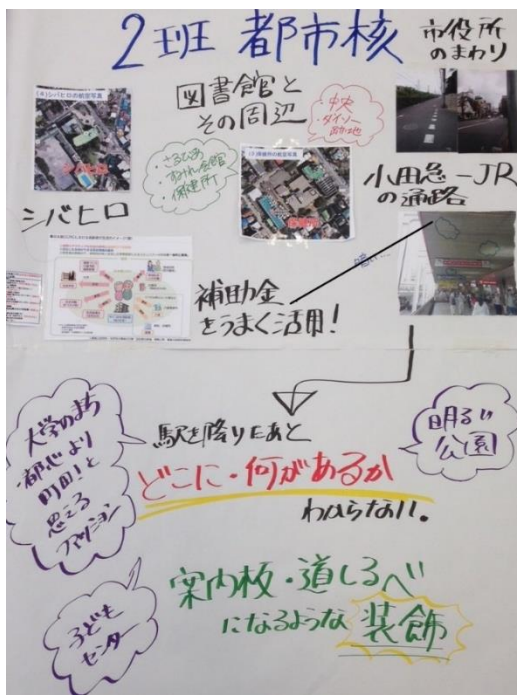
明るくおしゃれな駅前と市有地活用で付加価値が高まって

きらめいている

「駅前の空間やデッキ上を明るくおしゃれで、わかりやすくすることで、駅前のイメージを変える。」

「シバヒロやさるびあ図書館などの市有地、公園などをもっと活用してまちの付加価値を高める。」

- ・大学生は町田駅ではなく、都心に遊びに行ってしまう傾向があるので、おしゃれなファッション関係の文化が根付いているまちを目指す等の工夫が必要だと思う。
- ・小学生や美大生の作品をデッキ上に展示して、市民参加型のアートを展開する。
- ・小田急とJRの連絡通路（デッキ）が歩いていて暗いし、屋根に電飾もない。駅前なのに華やかさに欠けるため、例えば屋根をガラス張りにすることで光が射し込み、歩行者が明るい気持ちになれる工夫があると、駅前のイメージが変わる。
- ・駅を降りた後にどこに何があるかが分からないので、案内板や道しるべになるような装飾で、わかりやすくおしゃれな駅前を演出する。
- ・シバヒロ（旧市役所）、さるびあ、保健所等の市有地を一体的に整備し、集約や余剰地の活用等を進めることでさらに付加価値を持ったエリアにしていく。
- ・子どもの預かり場がなかったり、子どもを遊ばせる公園が暗かったりするので、町田市で暮らしやすい工夫をしていくことが大事。
- ・国の補助金をうまく活用しながら、高齢者や子育て世代が住みやすくなるような施設整備をする。



講師のコメント



具体的でいいと思います。第1回で高齢者も住みやすい工夫があったらよいという具体案がありましたが、今回出たイメージ等をそういった具体的な案と一緒に議論していくとより深いアイデアになっていくと思います。

3班

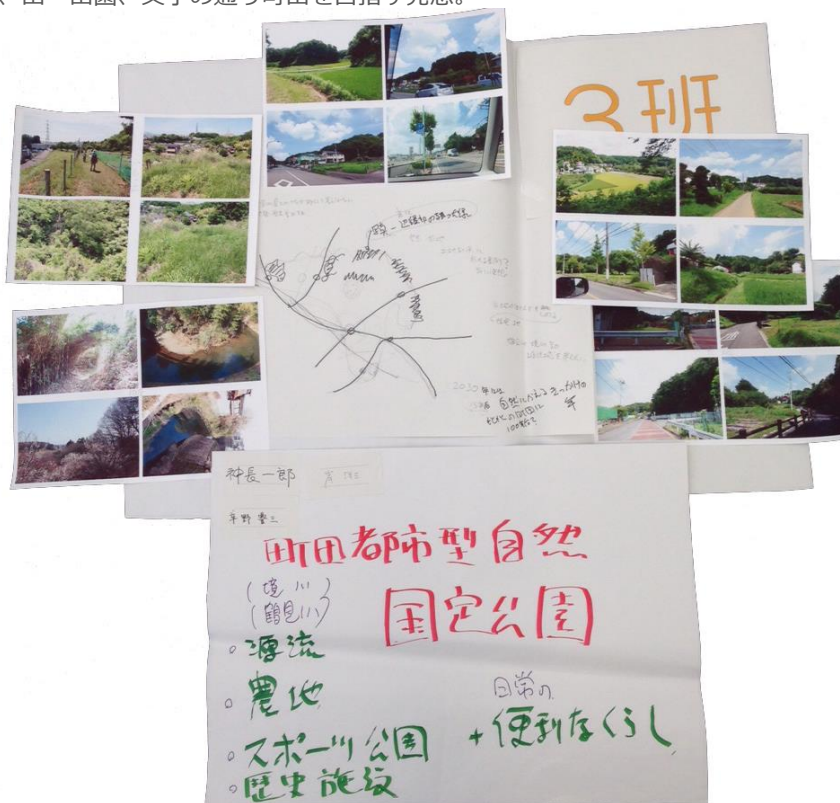
2030年の町田は

町田都市型自然国定公園化

できらめいている

「豊かな自然資源（源流域、農地、運動公園、歴史的施設）を活かした様々なライフスタイルを体験できるまちを目指す。」

- ・町田市は都市型ではなく、2030年に向けて自然回帰という方向性を考えるのが良いのではないかと考える。
- ・日常の便利な暮らしもありつつ、今ある豊かな自然資源など（源流域、農地、運動公園、歴史的施設）を活かして様々なライフスタイルを体験できるまち、目指すは町田都市型自然国定公園化。
- ・町＝まち、田＝田園、文字の通り町田を目指す発想。



講師のコメント



2030年のビジョンとして、自然に帰すというのは良い発想だと思います。うまく神奈川と東京を組み合わせるとハイブリッドなまちになるのも可能だと思うので、各々の活かせる点を整理してみたらどうでしょうか。

副次核※1
(鶴川駅周辺)

4班

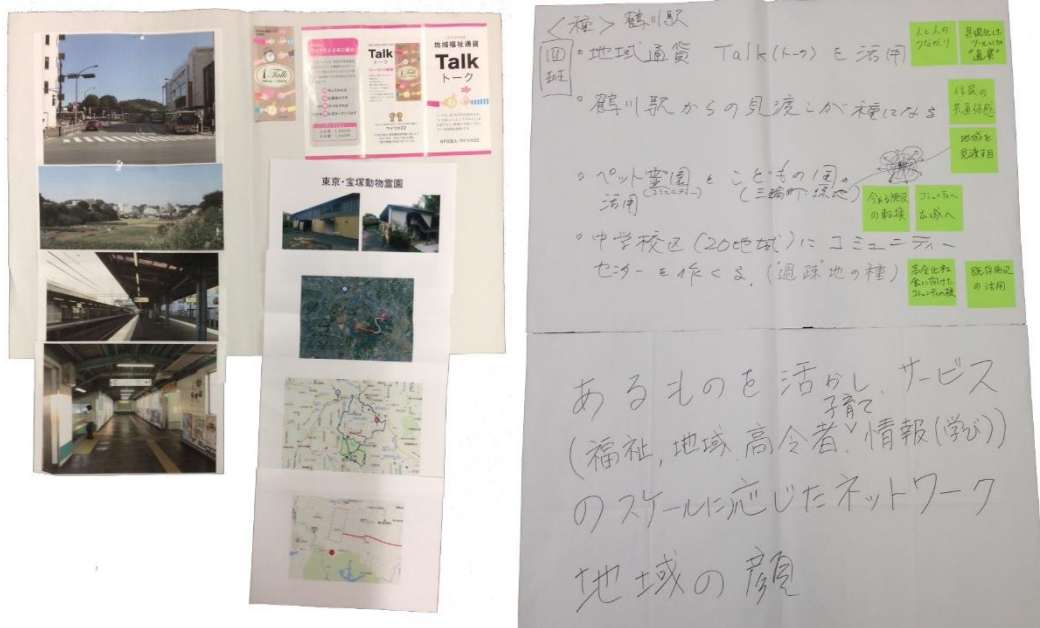
2030年の町田は

人のつながりや既存空間を活かしたサービスのネットワーク

できらめいている

「既存の施設や空間、人のつながりなど「あるもの」を活かしてサービスを生み出しそのネットワークで地域に行き届いたサービスを提供する。」

- ・既存の施設や空間、人のつながりなど「あるもの」を活かしてサービス（福祉、高齢者、子育て、地域通貨、情報、学び）を生み出し、それぞれのサービスのスケールに応じたネットワークを育むことが必要であり、そのネットワークの中に、地域の顔が見えてくれば良い。すなわち核ではない、各所で行き届いたサービスが必要である。



講師のコメント



全体的にサービスに着目している印象を受けました。そこでの歴史や記憶を大事に考えたまちのあり方を考えることは大事だと思います。
サービス視点で細分化して考えた時に都市核が核じゃないという発想にもなりうるし、必要なサービスを提言していくこともよいと思います。

※1 周辺地域の中心核となる拠点で鶴川駅周辺、南町田駅周辺、多摩境駅周辺のこと。

2030年の町田は

新しい宿場町のおもてなし

できらめいている

「武相荘など観光地や緑地を回り団地に着く→団地に漫画部屋や図書館がある&宿泊ができる→サイクリングで町田を回れる→仲見世通りなど町田の魅力を味わえる = そんな風に現代の宿場町としておもてなしをする。」

- ・町田駅周辺の東急ツインズの周りはサブカル要素を楽しむエリアとなっていて、仲見世通り付近になると高齢者の人や「昔ながら」を楽しめる場所が多い（最近昔ながらに加えサブカル要素も見受けられる）ため、こういったコンテンツのあるエリアを近くにもつ団地のエリアは、例えば宿泊機能として利用するのも有りではないかと考えた。
- ・バックパッカーや外国人、サイクリングをする人等が利用しやすいリーズナブルな宿泊機能を団地に持たせれば、人が集まってくるのではないかと考える。
- ・2020年のオリンピックをきっかけにおもてなしが始まる。
武相荘など観光地や緑地を回り団地に着く→団地に漫画部屋や図書館がある&宿泊ができる→サイクリングで町田を回れる→仲見世通り等町田の魅力を味わえる = そんな風に現代の宿場町としておもてなしする。
- ・鶴川駅からバスで町田を回れるようにしたり、屋根やベンチが設置されたバス停を導入する。



講師のコメント



団地はウルトラマンでの懐かしい映像が脳裏に焼きついています。宿場町だったのなら、そこにまちのエッセンスが残っていると思います。ピソ（スペイン）と呼ばれる階ごとに貸し出す宿泊機能がありますが、そういったものを参考にまちの工夫を凝らしていくと可能性があると思います。

<参加者の意見からわかること>

都市核においては、町田の顔とも言える場所であるため、“活気”“明るさ”“おしゃれな雰囲気”を求めている意見が目立っている印象であり、その実現手法として大学との連携、若者の参画、公共空間の活用、観光客や来街者向けのサービスの向上が提言されています。

それに対して副次核や住宅地については、自然資源や団地などの既存施設を活かしたサービスの提供やライフスタイルの提案がされました。具体的には団地に宿泊機能を導入し、町田のコンテンツ（サブカルチャー、スポーツ、商業、文化）に親しみながら団地に泊まれるようにしたり、既存資源や人のつながりを活かしたサービスのネットワーク形成に関する提言が挙げられています。

町田という土地や人の特徴や資源を捉えたアイデア、2020年のオリンピックを見据えるなど具体的なアイデアが多く、また新しい施設をつくることよりも既存のものを工夫して上手く利活用したり、より市民に身近な公共空間の創出が求められていることが分かります。



ファシリテーター

山田 小百合(やまだ さゆり) 氏 (NPO 法人 Collable 代表)

障がいのある人もない人も誰もが包摂される学びの環境づくりを実践するため、ワークショップや調査をしながら大人から子どもまで多様性を活かした学びと創造の場をデザインしている。

ねらい

◎みんなが行きたくなる地域の拠点をインクルーシブデザイン※2の手法を用いて考える。

ワーク内容

「そもそも公共施設って何だろう？」

～みんなが行きたくなる地域の拠点を考える～

行政が運営している公共施設だけではなく、カフェや公園といったような、民営のものや建物ではないものも含めて考えることで、一旦「公共施設」という固定観念を取っ払ってみんなが行きたくなる地域の拠点を考えた。

グループワーク 1

①自分のよく行く「人がたくさんいる場所」を班毎にたくさんあげていく。

あがったのは、カフェ、駅前の居酒屋、ラーメン屋、カラオケ、バーベキュー、スーパー、公園、広場（シバヒロ・カリヨン広場）、本屋、図書館、サッカー場、スポーツジム、友人の家、映画館、職場など・・・

②①のワークで挙げた場所で見かけない人を考える。

グループワーク 2

①グループワーク1であがった「見かけない人」の人物像を想定し、似顔絵・名前・年齢・趣味嗜好や特徴・どうして「人がたくさんいる場所」にいないのかを考える。

②自分達や①で想定した人のどちらも行きたくなる理想の地域の拠点を考える。

※2 障がい者や子ども、お年寄りや妊婦といった人を、初期の計画段階から巻き込んで対象とし、デザインすることで、誰にとっても使いやすいものを生み出す手法。

第3回の成果

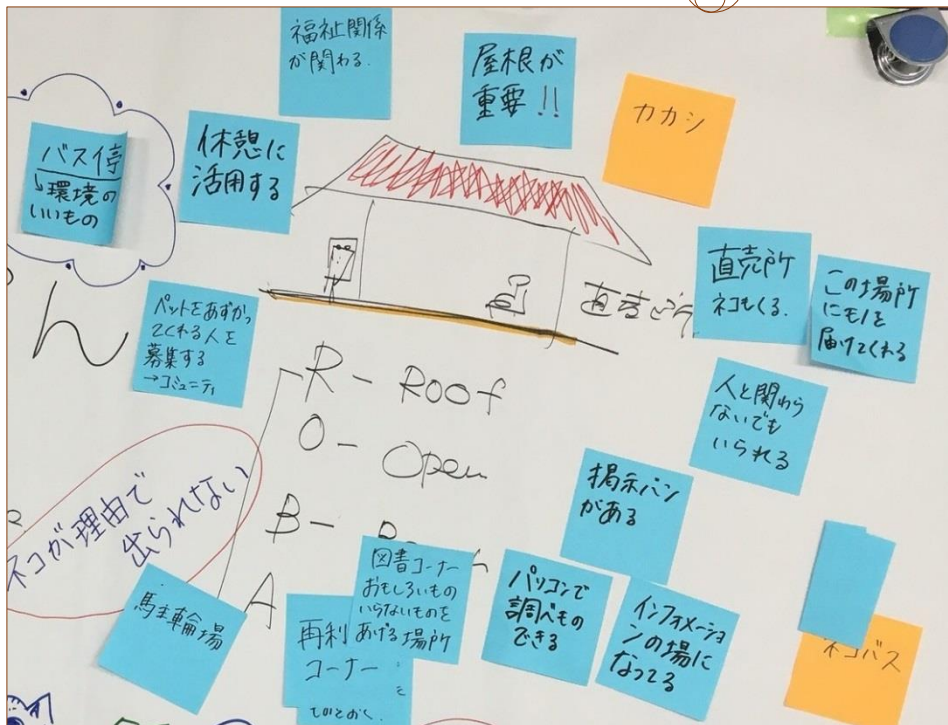
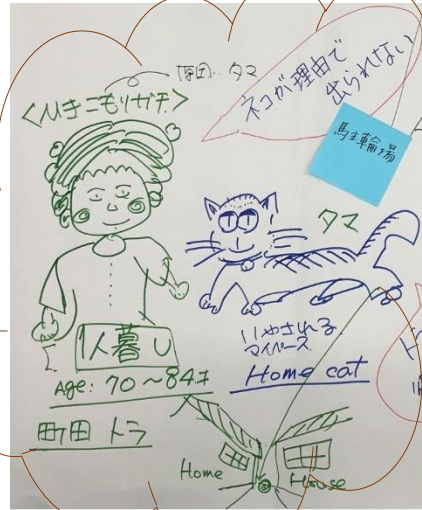
みんなが行きたくなる地域の拠点のアイデア

1 班

想定した人物像

多機能の屋根付きバス停

- 公共交通を活性化させるという視点とともに、快適で、色々と楽しめる地域の拠点をつくるために色々なことができる多機能のバス停をつくる。
- その拠点には、コミュニティボードがある/直売所がある/おしゃべりができる/図書コーナーがある/調べものを調べることができる場がある/ペットを預けられる など

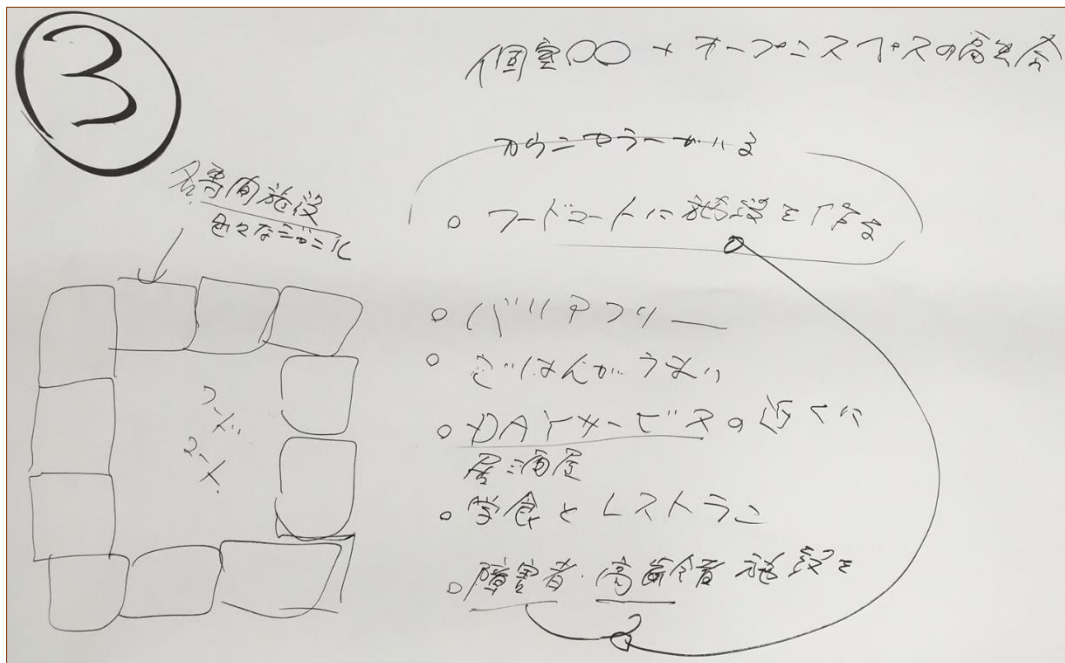
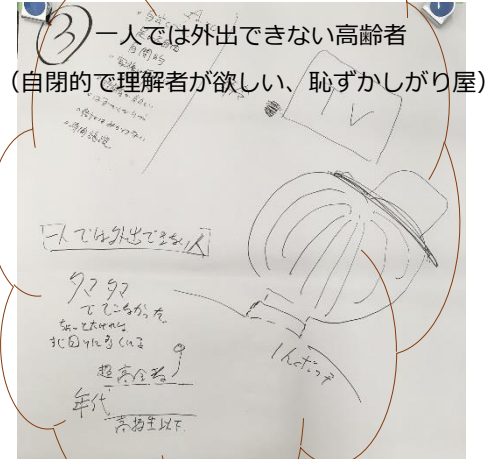


3班

個室〇〇 + オープンスペースの融合

- 周りに専門施設が配置されたフードコートがコンセプト。
- デイサービス、学校に行けない子たちが来られる場所、子育てママたちの居場所等、なかなか決まった場所にしか行けない人たちが集まれる空間を周りに設け、それらを繋ぐまんなかのスペースをフードコートにする。
- 食事のときは必ずフードコートに出てくる、あるいはそういうところが苦手な人でも行きやすい共有スペースで過ごせるようにすることで、複合施設での交流を可能にする。

想定した人物像

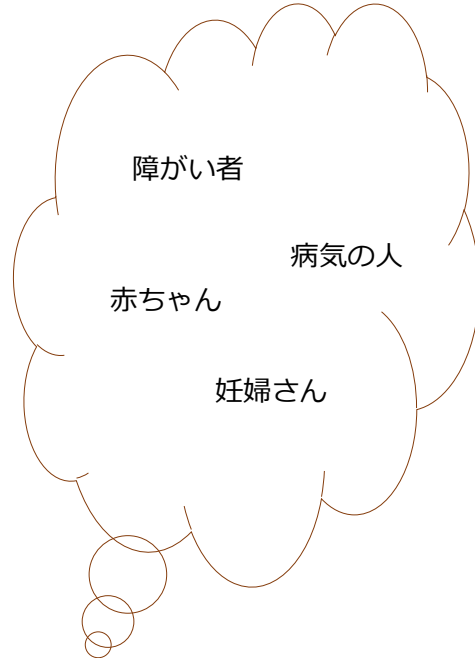


4 班

多目的な複合施設

- 誰でも利用できる場所としての複合施設。
- 駐車・駐輪施設が多いことは重要。
- 飲食店有り／アルコール有り／ケア機能／スポーツ機能／図書機能／子どもや高齢者の共有スペース／温泉施設／映画の上映機能／プラネタリウムの併設等があると良い。

想定した人物像



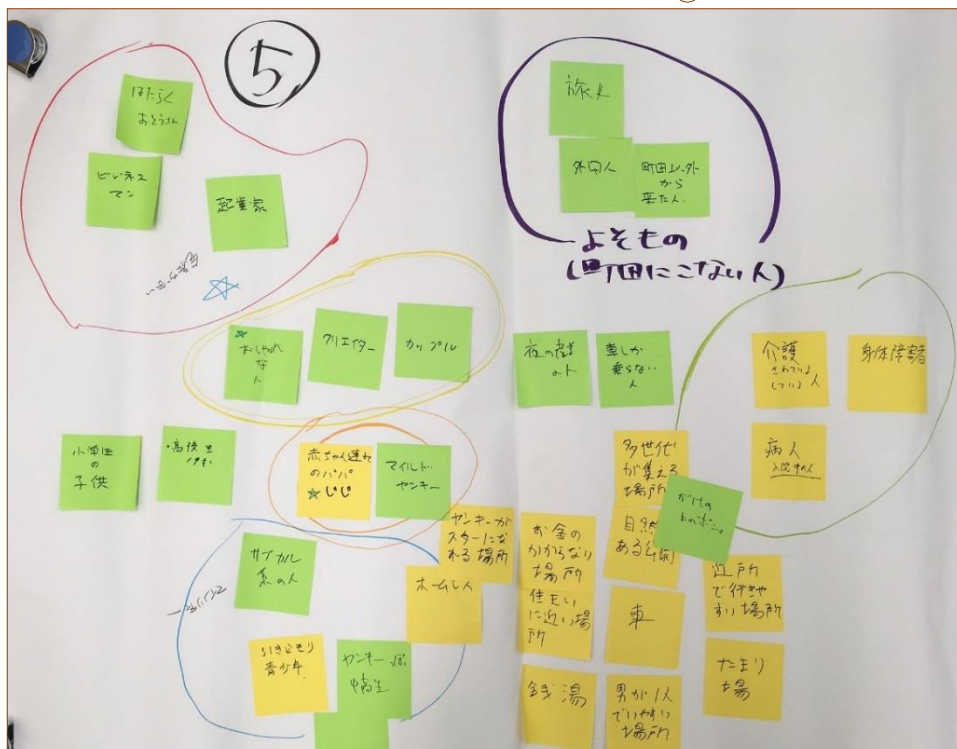
5 班

まちづくりに関われる機会の創出

- 具体的な施設イメージまで到達出来なかったが、マイルドヤンキー※3については、こういう人たちを町田で見ないが、地元愛も地域愛もあるのがマイルドヤンキーだと思うから、そういう人達がまちづくりに関わったら良い。
- 母親がママ友とどこかへ出かけた時に、お父さんやおじいさんが活躍する時代が来ている。そういう人たちが居心地の良い場所を作ることや、まちづくりに関わることが大切。

想定した人物像

マイルドヤンキー
 町田にこない人（旅人、外国人）
 子育て中のお父さん
 ビジネスマン
 孫育て中のおじいさん
 クリエイター
 ひきこもり青少年



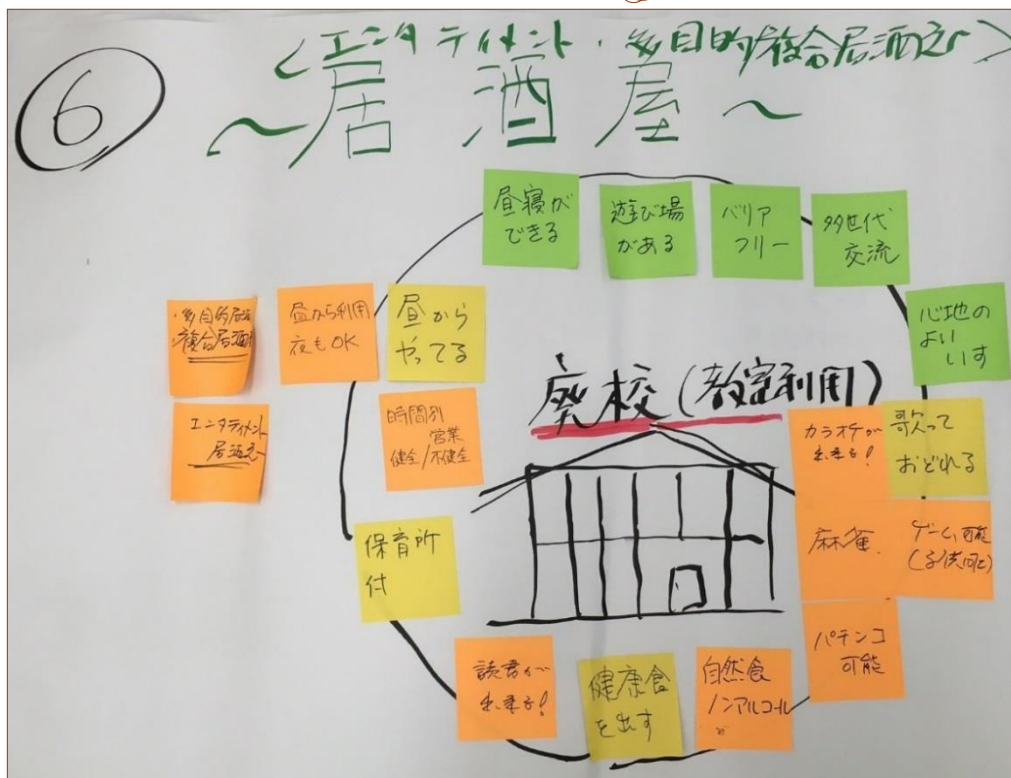
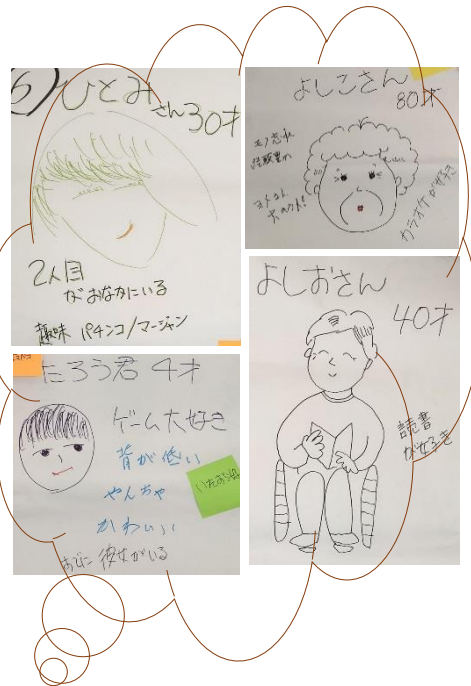
※3 地元にならざる、同年代の友人や家族との仲間意識を基盤とした生活を送る若者のこと。

6班

廃校を利用したエンターテイメント
多目的複合居酒屋

- この4人が誰でも使えるのは、昼寝ができる／遊べる／麻雀ができる／パチンコの景品に食事等と引き換えがある／ノンアルコールもある／保育所もある／読書もできる／カラオケもできる／昼からやっている、というような要素が必要だと想定した。

想定した人物像



<参加者の意見からわかること>

具体的に整備する施設のアイデアになっているものもあれば、アイデアまではたどりつかなかったものもありましたが、1班では、誰もが利用する公共交通機関を活用した地域の拠点づくりが提言されており、そういった拠点に、人々が利用したい機能を一部分でも持たせることで、その場所が人の集うコミュニティ拠点となることの可能性について考えられました。

3班では、個別のスペースが必要な利用者への配慮と、かつ共用するスペースを持つことによってコミュニケーションが取れることのどちらの側面も大事であるという考えから、フードコートの発想で、特定の利用者がある個々の機能と、利用者の誰もが利用できるスペースの創出が今後の公共施設のデザインに必要ではないかという提言がされています。

3班、4班、6班に共通しているのが、「食べ物やお酒がある場に人は集まる」という価値観であり、公共空間だとしても、食べ物やアルコールの提供がある場が人のコミュニティを育むのではないかという提言になっています。

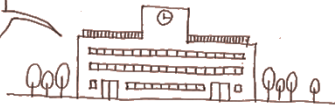
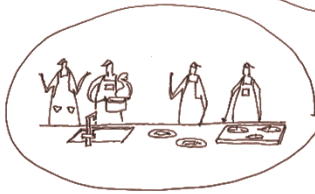
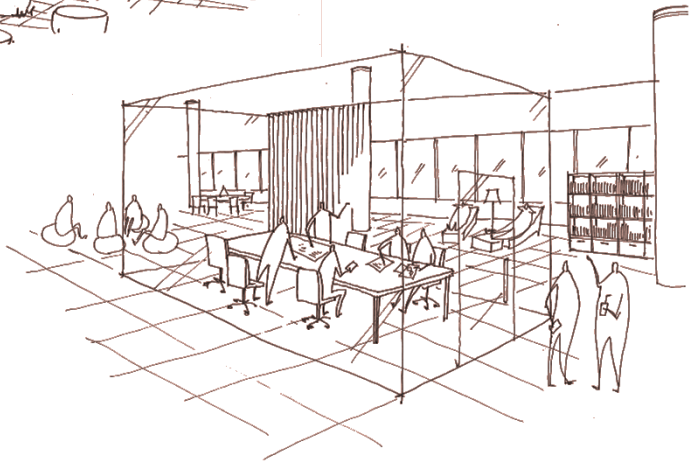
5班の提案であれば、具体的に施設を考えていく際に、地域に根付いている存在を巻き込むことが大事ではないかという、地域参画の重要性を提言したものとなっています。

また、6班においては、廃校を利活用することで、色々な立場の人が気を使わず、かつ大勢で楽しめる空間が創出できるのではないかという可能性を提言しています。

講師のコメント



各班が色々な人を想定していく中で、中には人間以外に着目するという班があったように、多様な視点で考えられたので良かったと思います。具体的な施設まで想定出来なくても、まちづくりに必要だと思う人物像をあぶり出せていることも大切です。居酒屋のような普通に皆さんが行く場所をもっと皆と「ともに」使えるように工夫するという考えだけではなく、そこに廃校の利活用という町田市が抱える現状や課題とを結び付けているところも良かったと思います。



第4回

多様な人々の日常をイメージする

～中町をケーススタディに～

10月17日(土) 10:00～12:30



ファシリテーター

今和泉 隆之 (いまいずみ たかゆき) 氏 (空想地図作家/ライター)

7歳から実在しない都市地図「空想地図」やバスの路線図を描き始め、今も描き続ける。都市や地域情報、地図に関する講演、ワークショップ、執筆活動を行う。また、NHK教育番組やドラマで使われる架空の舞台の地図制作を行っている。

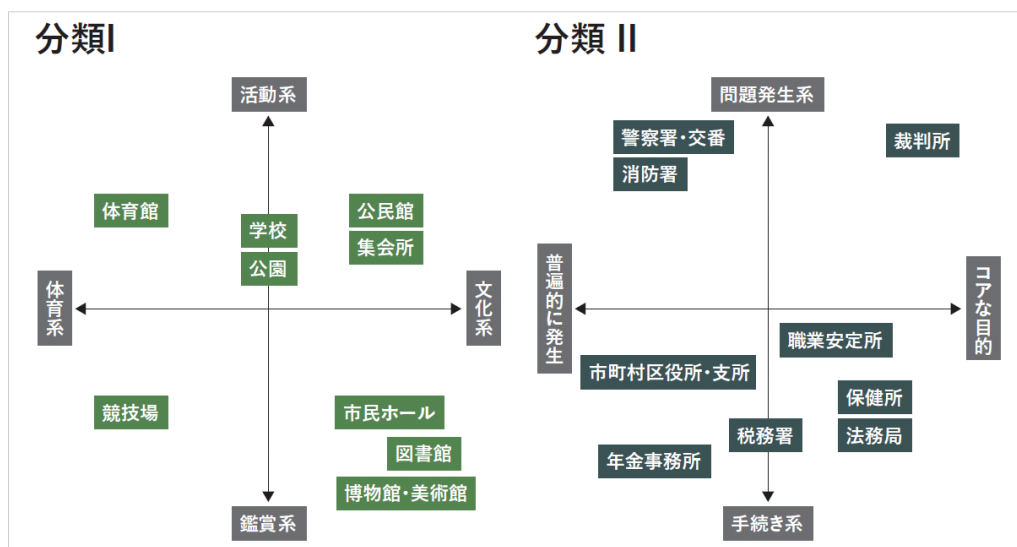
ねらい

◎まちのしくみを学び、それを前提に公共施設や空間の組み合わせに関するアイデアや中町の公共施設の再編に関するアイデアを考える。

ワーク内容

個人・グループワーク 1

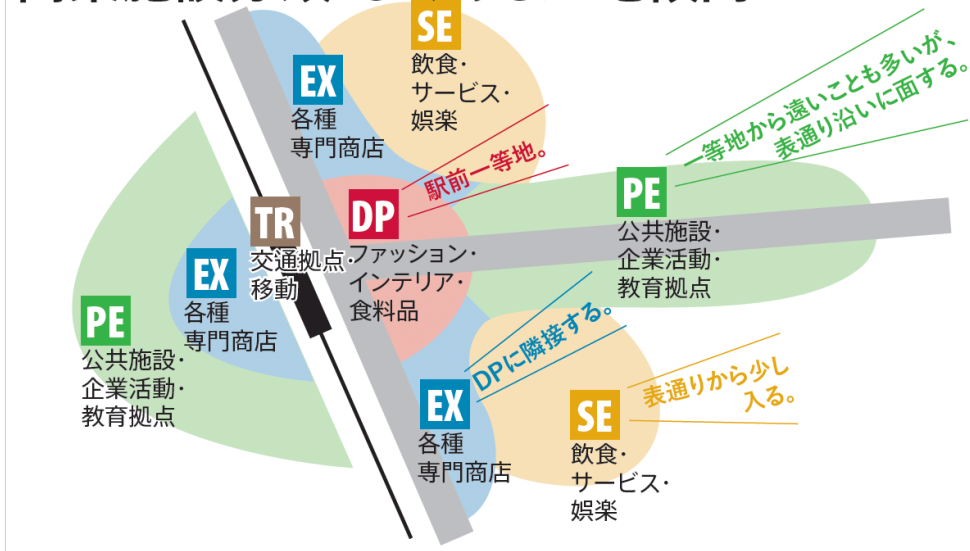
◎下図の公共施設分類を参考にしつつ、この中に入らない新たな公共機能を考える。
新しい建物を建てることは難しくても、今ある公共施設にその機能を盛り込むことや、新しく公共施設を建てる際に盛り込む、あるいは民間の施設や空間に盛り込むことも可能かもしれません。



個人・グループワーク 2

◎個人・グループワーク 1 で出た施設を参考に、下図公共施設・商業施設のよくある立地傾向を見ながら、回遊性の高い公共施設、相性の良い公共施設、および他の機能(商業施設)を考える。

商業施設分類・よくある立地傾向



グループワーク

◎中町地区で、既にある公共施設の機能と、個人・グループワーク 1で出た新しい公共機能を盛り込み、相性も考慮しながら、どう再編するとよいか考えてみよう。

第4回の成果

中町地区の公共施設の再編に関する具体的なアイデア

具体的な施設
のアイデア

・健康に関する施設の保健所・競技場・体育館等が一緒になっていたらよいのではないかと。
・球場からシバヒロまでのランニングコースをつくる。

・図書館、保健所のある一角とシバヒロのエリアを一体的に考えた整備が可能ではないかと。

・町田一中と町田一小を統合して、一小とシバヒロを同じ敷地として考える。

・公園に消防署や競技場が一緒になっていると、利用者や職員の意識向上が図れるのではないかと。

・シバヒロに大きなスクリーンを設置して、昼間はイベント、夜はシアター化すると人が集い賑わう。
・駅からシバヒロに安全に歩いていける道を整備する。

・点在している法務局などを駅に近い場所に配置できると高齢者にも使いやすくなる。



具体的な施設以外 のアイデア

- ・対象のエリア内にあるものだけでなく、離れたエリアのものも上手く集約すれば、その余剰地が新たな付加価値を持った場になるのではないかな。
- ・少子高齢化の中で、介護や健康医療や福祉といった機能を中町でワークシェアすることがよいのではないかな(例：訪問介護、訪問医療等)。
- ・中町は公共施設が多いが、必要なものはそのまま活用し、必要ないものは住民たち向けに転換することで、中町自体をコンパクトシティ化するのが良いのではないかな。
- ・新しい何かを整備するというよりは、機能の入れ替えや換地をしながら、町田市全体の都市核という意味合いと、町田駅周辺の副次核という役割、それぞれの機能に寄り添いながらシャッフルするという方法が大事ではないかな。
- ・公共施設間のコミュニティバス（1時間毎程度）があると良いのではないかな。

〈参加者のアイデアの方向性〉

- **中町の公共施設一体整備によるコンパクト化と余剰地の利活用**
⇒既にある建物の活用と、一体的な整備により出てくる余剰地の利活用
- **機能同士が連携し相乗効果を発揮する複合的な公共施設**
⇒複合化により利用者にとっての利便性が向上するとともに、機能が一箇所に集まることで新たな価値を創出
- **高齢者や子育て層に配慮した計画づくり**
⇒高齢者や子育て層が利用しやすいような交通利便性の確保や、子ども達の教育環境の向上に配慮するような計画
- **福祉・健康・医療等のネットワークを充実させる仕掛けづくり**
⇒福祉のサービスや担い手のネットワークが形成されるような仕掛けづくり
- **公園や広場、施設を活用した市民や住民の活動の場づくり**
⇒芹ヶ谷公園やシバヒロ、公共施設を市民や近隣住民の様々な活動の場・交流の場として機能させる
- **シバヒロの活用**
⇒シバヒロの土地を活用した第一中学校と第一小学校の複合化案やシバヒロのさらなる活用によるエンターテイメントやにぎわいの創出



ファシリテーター

馬場 正尊（ばば まさたか）氏 （建築家/OpenA 代表）

建築設計、都市計画まで幅広く手がけ、ウェブサイト「東京 R 不動産」を共同運営する。使われてない公共空間を使いたい市民や企業とマッチングする「公共 R 不動産」も運営中。

ねらい

◎各回を振り返り、改めて町田市の未来を考えるとともに、それに向けて自分が今できることを考える。

内容

講演内容

これまでは市民からすると、公共施設・公共空間は行政のものであるという意識が高い傾向にあり、市民が自らその空間を守るという意識や、空間の魅力・質を高めようという意識が欠けていた。

戦前や戦後の昔を振り返れば、広場も、空き地も、公民館のような場所も、自分たちが遊びや自治活動や趣味を守るために大切にしてきたが、高度経済成長期を経て、公共施設が増え、管理を行政が担うようになったことで、自分たちのものであるという意識が薄れた。

今後は、公共施設の老朽化が進むとともに人口も税収も減っていくと予想され、行政が管理してきた空間は、管理しきれなくなっていく。

そこで、これからは行政に頼った空間づくりではなく、市民や企業等の民間が主体となり公共空間を管理・運営して市民や民間の新しい公共空間を作り出さなければならない。

そういった新しい公共空間のポイントは、公共・民間ともに施設が閉ざされた空間ではなく様々な人が集まる開放されたスペースであること、人々に開かれたパブリックな空間と占有のプライベートな空間が曖昧になるようなデザインであることである。

そのような新しい公共空間を既存の建物や空間を活用したリノベーション手法を用いて創造する。実践として、廃墟となった倉庫やビルを改修し民間のオフィスやテナントとして活用するだけでなく、ショールームやイベントが出来るスペースも確保することで人々に開かれた空間にした事例、禁止事項ばかりの公園ではなく屋台やパブリックビューイング等のイベントも行うことができるようにした広場づくりの事例、個々の建物

▼講演の様子



だけではなく、エリアをリノベーションして新しい価値を創造することで、まちを訪れる人や歩き回る人を増やす事例等がある。

個人ワーク

◎それぞれが研究会を通じて改めて考える「2030年のきらめく町田」がどんなものか、それに向けて自身が今からできることについて考えた。

参加者自身が今からできること

- ・自分の建築企画が活かせる事なら何でも。
- ・広い町田市それぞれの場所や地域の持つ魅力を掘り起こしてみたい。そしてその魅力を継続的にみがき上げたい。
- ・町田市に向けて積極的なアイデアの働きかけ。そのための相談窓口がわかりやすいとよいと思う。
- ・現在活動しているまちづくり NPO の継続。
- ・今後の企画・運営への参加。広報の役割。
- ・おすすめスポットの情報発信。ワークショップの開催。
- ・世代間の連携を強める。自らが積極的に関わりを持っていく。
- ・福祉ネットワークと他領域ネットワークとのジョイントを試行する。
- ・建築家市民としてのアイデンティティーの構築に協力する。
- ・市民参加型をもっと進め、小集団での起業促進を含め、何らかの形で今後とも相互交流の会をしていきたい。
- ・公共施設と商業施設が融合した新しい『人が集まる場所』を提案し、そこに集まる人々が行政に要望を伝えることで市民目線のまちづくりに変えていく。
- ・地域交流。地域の特性を知る。
- ・地域でやらなければならない課題について今後も進めていきたい。
- ・馬場先生の本を読んで、自分の思っていることと合わせて考えていきたい。
- ・子ども達にアイデアを出してもらう取組「2030 年中学生在が考えるまちだ」、職場体験を活用して地域を知る取組、民間企業の部活と合同部活⇒地域のお祭りなどでの発表会（企業側は CSR、学校側は開かれた学校）。
- ・少人口で経済が成り立つしくみ（ガラガラの列車で皆座れる状態での採算性）、少し昔の自然の見直しを広く発信していきたい、公共の縮小化をもっと訴えていきたい（市役所庁舎の民間開放）。
- ・団地の空室などに個人のお店が入ったり、別の活動ができるとよい。そのようなことが可能なのか、事例を見て調べたい。建築の仕事についてもまちに対して開かれた場所で活動できるように提案していきたい。
- ・福祉施設として、市民が身近に足を運んでくれる環境について考えてみたい。事務所に事務机を置くという当たり前の発想から、個人情報を守るスペース確保とフリーなスペース（相談窓口を丸机と丸椅子にするなど）をつくるなど発想を広げて考えていきたい。地域の空いているスペースを活用し、障がい者の GH と市民がもっとつながれるイメージをもって取り組んでいければと思う。
- ・町田の中心部だけではなく、自分が行ったことがないところに行き、そこで新しい発見を探す。人とのつながりを大事にして、皆で町田のことを考える。
- ・それぞれの特技を持ち寄って、すぐに実験的な取り組みを始められる場づくり。そういった拠点の盛り上げや運営⇒空き物件の借り上げ、運営者の募集。今回のようなワークショップを月 1 回でも続けていくこと。
- ・町田市の市政に目を光らせたい。枠に縛られて（予算や人的な面等で）できないことや市民にとって大切なことに目を向けて活動したい。
- ・仲間づくりを議論して、合意形成をしながら責任ある活動運営を行う。ビジネスと割り切らない営業活動を人と

まとめ 市民の考える新しい公共施設・公共空間

1 公共施設及び公共空間に求められている機能・役割

研究会の各回において出された参加者の意見を分類し、施設や空間に求められている機能や役割について整理しました。

参加者の具体的な意見	施設や空間に求められている機能・役割・性質
<ul style="list-style-type: none"> ・町田駅の小田急とJRの連絡通路が歩いていても暗いし、屋根に電飾もない。駅前なのに華やかさに欠けるので、歩行者が明るい気持ちになれる工夫があると、駅前のイメージが変わるのではないか。 ・駅周辺の道は狭くて暗いので、もっとまちが明るくなる工夫があったらよい。 ・バスターミナルエリアは、学生が集まって活気がある一方、まちの魅力としては低下しているイメージ。 ・楽しい道、機能のある道があると嬉しい。 ・原町田大通りが殺風景。 	<ul style="list-style-type: none"> ・まちの魅力的なイメージ（明るい、賑わい、活気等）を表現する ・人の賑わいと活気を生み出す場
<ul style="list-style-type: none"> ・東急の前のモニュメントはアートの要素として発展できそう。 ・舞台装置のような花壇があるので、これを活かせないかと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・アートの要素 ・芸術活動の場
<ul style="list-style-type: none"> ・神奈川との広域連携も必要ではないか。 ・人の動きを踏まえて、地域で一緒になってまちのあり方（公共サービスのあり方）を考える必要がある。 ・町田市は神奈川県とされているし、インフラ、電話番号、バスの路線等が神奈川のもの共通している点が多いため、市内の核でのみ考えるのではなく、市外も含めた広域の視点で見直す必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・立地的な利便性 ・他市との連携
<ul style="list-style-type: none"> ・辺縁部にあるのがたまたま残った緑であるが、今後空き家等が増えていくことを考慮して、自然から借りていた住宅地を自然に返すという動きが、きらめく町田に繋がっていくのではないか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・時代や状況の変化に応じた可変性
<ul style="list-style-type: none"> ・住民参加ではなく参画でなければならないと思う。 ・人と人とのつながりが重要。 	<ul style="list-style-type: none"> ・市民参画の推進の場
<ul style="list-style-type: none"> ・子どもや外国人、観光客を受け入れられる託児所や案内所があると良いのではないか。 ・子どもの預かり場がなかったり、子どもを遊ばせる公園が暗かったりするので、暮らしやすい工夫をしていくことが大事。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子育てを支援する場
<ul style="list-style-type: none"> ・趣味の作業場が公共的な空間で得られると良い。 ・料理ができる、マシンや工具が借りられる場所が気軽に利用できるが良い。 ・24時間利用可能なシェアオフィスがあると良い。 ・図書館+ワーキングスペース・カフェ。 ・スマートフォンが無料で充電できる場所がほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・仕事や趣味の活動を充実させる場 ・気軽さや柔軟さ

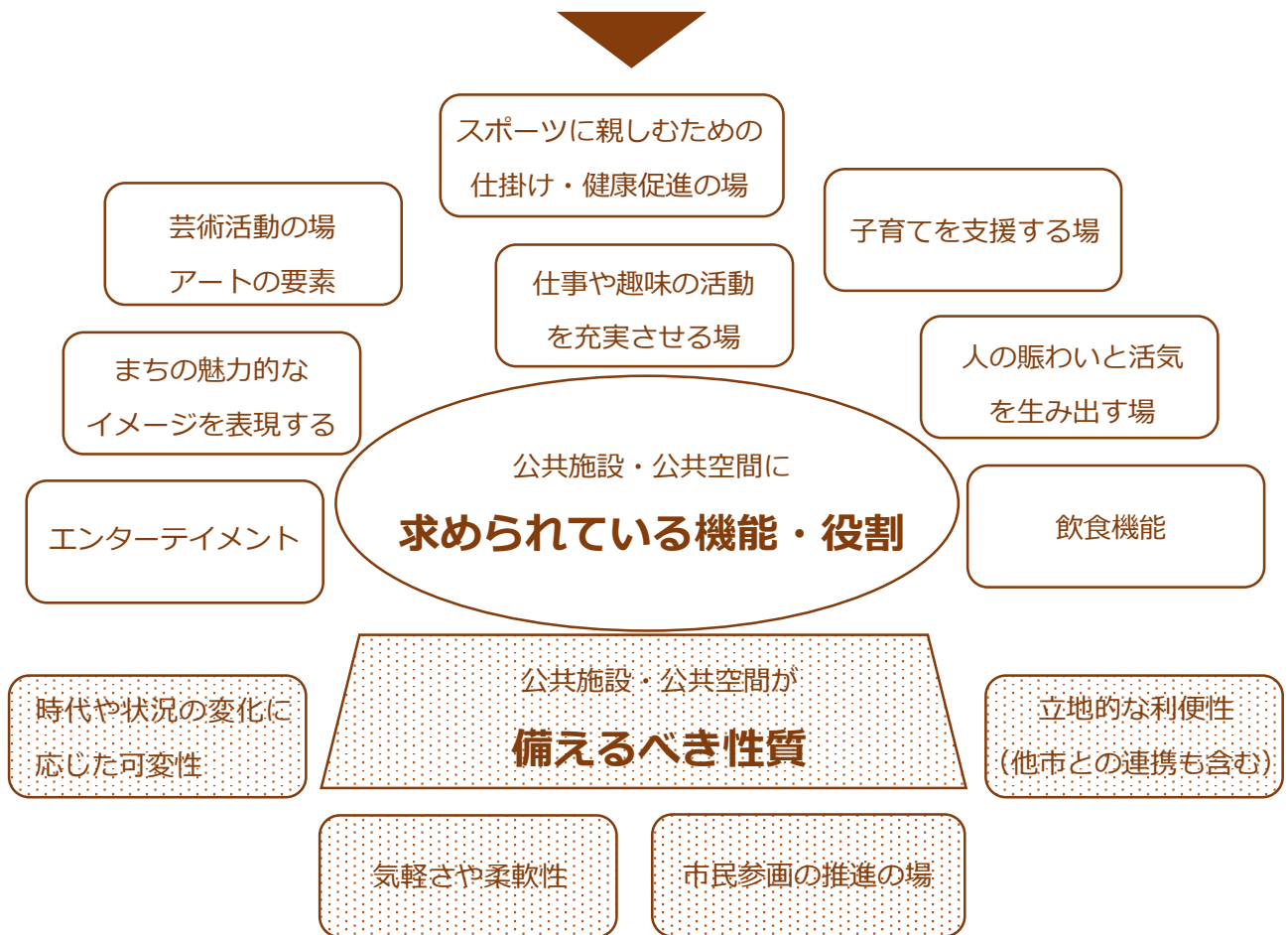
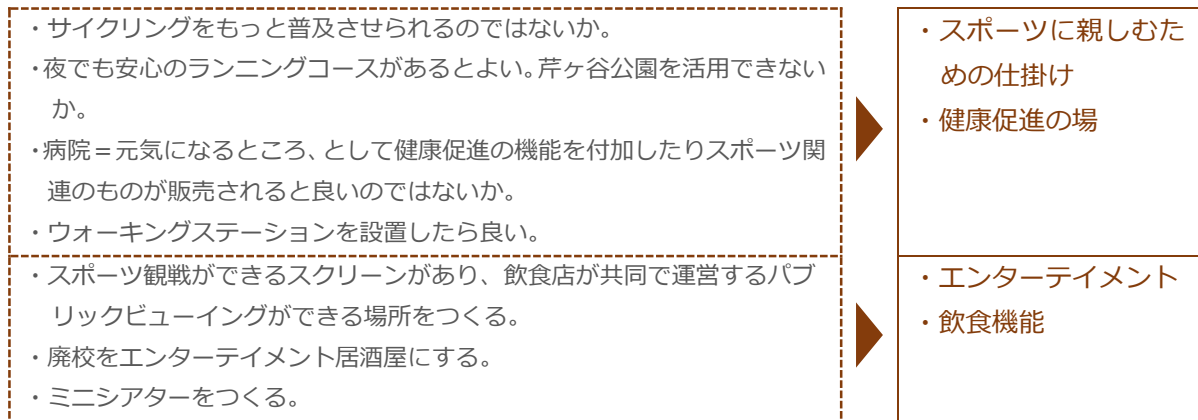


図 参加者意見のイメージ

<参加者の意見からわかること>

従来の公共空間はその機能自体（例えば道路であれば車や人が安全に交通するという機能等）の発揮が重視されて維持管理運営がされてきましたが、これからはそれに留まらず、「まちの魅力的なイメージを伝える」という機能や人の賑わいや活気といった「まちの魅力を生み出す」といった付加的な機能まで求められていることがわかります。

公共施設については、多様な個人活動（趣味、仕事、運動）をする場の需要があることがわかります。また利用者の視点から、人が集まる場になるために備えるべき機能として、「飲食機能」や「エンターテインメント機能」など今まで重視されていなかった機能も着目されました。しかし、これは従来のような公設公営の施設を想定しているのではなく、様々なサービスを展開している民間と公共がそれぞれの得意な部分を担い、連携することで実現する新しい形の空間やサービスを想定したものです。

また、公共施設や公共空間ともに、このような時代とともに変化するニーズに対応したり、状況に応じて必要な量に減らしていけるような可変性、誰もが気軽に柔軟に使えるような運営、市民の日常の行動と関係づけた立地の利便性を他市との連携も視野に入れながら追及することなどが重要であることがわかりました。

2 新たな公共施設・公共空間づくりに必要な要点

今後新たな公共施設・公共空間づくりを目指していくにあたって、既存の公共施設の見直しと再編は非常に大きなテーマになります。そこで、参加者から様々な意見が出た中で、公共施設の再編に関する考え方やアイデアをもとに、今後公共施設の再編に取り組む際の要点をまとめました。

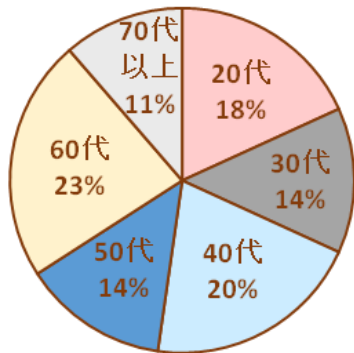
- 老朽化した公共施設の建替え等について、無駄な解体・建設をせずいかに既存の施設を有効活用できるか。
- 単なる公共施設の削減ではなく、余剰地の有効活用や集約機能の利便性向上をどう実現するか。
- ハコモノの機能についてのみではなく、日常的に市民や近隣住民の活動や交流に繋がるようなソフトの機能をいかに盛り込めるか。
- 福祉・健康・医療・子育て等のサービスや担い手のネットワークが形成されるような仕掛けをいかにつくっていきけるか。
- 4つの核の強化だけでなく、地域に子どもからお年寄り、障がい者や妊婦など多世代で多様な人々が集えるコミュニティ拠点をいかにつくっていきけるか。
- 公共の機能と民間の機能を効果的に共存・連携させて、より市民が使いたくなる施設整備や新しいまちのあり方の実現ができるか。
- 公共施設の再編を機に、既存の公共施設そのもののあり方を見直し、これからの時代にふさわしいサービスを提供していきけるか。
- 立地や建物の状態を活かし、民間活力の導入によってどこまで市民のための公共空間の創出が実現できるか。
- 市が抱える課題等の解決を図りつつ、市民が求めるエンターテインメント性や柔軟性についてもいかに対応できるか。

また、これらの要点に加えて、公共施設の再編に市民自身が参画すること、民間事業者等を巻き込み民間活力を活用したまちづくりを進めること、公的財源のみではなく市民や利用者、民間事業者からの資金調達の可能性を検討し、新たなサービス提供のあり方を追究することが必要であると考えます。

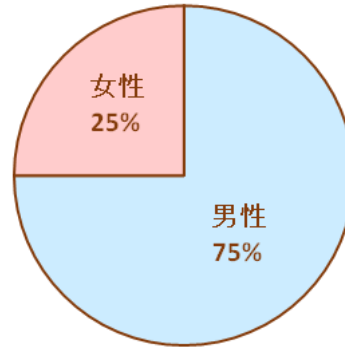
3 参加者概要

本研究会の参加者は、市が公募し、志望動機とともに参加意欲を表明していただいた44名の方々です。若い方から高齢の方まで幅広い世代の方々にご参加いただきました。

参加者の年齢層



参加者の男女比



参加者と町田市との関わり

